菊地昌典先生を偲んで
――追悼号への序――

国際学部長
小田　英郎*

『敬愛大学国際研究』第２号となる本号は、故菊地昌典先生の追悼号として、ここに刊行されることとなった。菊地先生は、国際学部が発足して２ヵ月もたたない1997年５月22日、胃癌のため急逝された。誠に残念なことであった。

国際学部の前身は千葉敬愛短期大学に増設（1990年４月）された国際教養科であるが、菊地先生は同科の創設に力を尽くされ、さらにそれの改組転換（いわゆる四大化）による国際学部の創設に当たっても、開設準備委員長の大役を担われた。文字通り国際学部の生みの親であった。

私も菊地先生のお誘いで「学部長予定者」として、国際学部創設の仕事に数年間たずさわった。この種の仕事を経験した人はよく分かると思うが、それは誠に面倒な、苦労の多い仕事であった。少子化の急激な進行のなかで、大学や学部の新規開設は原則抑制というのが文部省の方針であって、特にそうした制約の大きい首

＊おだ・ひでお　Hideo ODA：Dean, Faculty of International Studies.

都圏で、短大からの改組転換とはいえ定員増を伴う四大の新学部の設置認可をとるのは、容易な仕事ではなかった。菊地先生と私は、どういう学部学科を作るかというところから始まって、どのようなカリキュラムを組むか、教員スタッフをどう構成するか、入試方法をどうするか、卒業生の進路をどう確保するか、などなどの問題をめぐって、頻繁に意見交換を行った。

こうして国際学部国際協力学科の青写真が出来上がり、幸い文部省の設置認可も下りて、当初の予定より１年早い1997年４月に、新学部は発足したのである。

菊地先生が体の変調を私に漏らされたのは、国際学部発足の２、３ヵ月前のことであったと記憶している。実は胃が痛む、とのことであった。それから少しして、胃に腫瘍があるという医師の診断だった、という話をされた。「悪性じゃないと思うんだがなあ」と半ばつぶやくように言われたときの菊地先生の表情は、いまでも鮮明にまぶたに浮かんでくる。

国際学部がいよいよ発足した1997年の入学式は４月８日であった。菊地先生はその入学式に出席され、国際学部の第一歩を見届けたうえで、その翌日入院された。手術は成功したと聞いていたし、お見舞いに伺ったときの菊地先生は術後とは思えないほどお元気そうに見えた。だから５月22日早朝に亡くなられたという知らせを聞いたとき、にわかに信じることができなかった。そんなはずはない、と思った。悲しみを覚え始めたのは少したってからであった。

国際学部の創設と発展にかける菊地先生の熱意には、並々ならぬものがあった。2001年、まさに21世紀の黎明を告げるこの年に、国際学部は卒業第１期生を出すことになっている。菊地先生は国

際学部の土台作りの時期となるそこまでの４年間、全力で学生の指導に当たられるはずであった。それが、１度も教壇に立つ事なく急逝されることになって、さぞ無念であったと思う。

国際学部創設に命を懸けた先生の遺志を、学部発展にどうつなげていくか、いま私は、改めてそれを考えながらこの文章を綴っている。

最後になったが、この追悼号には、学部スタッフの学術的な論稿等のほかに、菊地先生と親しく交流された学外の10人の方々にお書き戴いた追悼文が掲載されている。これらの追悼文を通して、ソ連／ロシア研究者としての側面、日中関係正常化・日中学術交流の促進に献身的に関わった側面、趣味人としての側面、人情味溢れるその人柄といった側面など、さまざまな角度から見た菊地先生の人間像に、或いは菊地先生が生きた時代というものに、読者は迫ることができる。

ご執筆戴いた方々に厚く御礼申し上げて、この前書きの結びとしたい。

1998年11月